

二〇二五年一〇月三〇日

銀杏の実のおびただし神の庭
命綱揺れて窓拭き冬隣
紫の紋幕つらね菊花展
ゆりかもめ大群連れて大漁旗
牧の牛鼻息白く草を食む
犇めける大漁旗や浦祭
稲架襖端山の影の濃ゆく落つ

よし女
さつき
菜々
宏虎
智恵子
よし女
三刀

二〇二五年一〇月二十九日

奥嵯峨の藪かけぬけて初時雨
秋澄むや棟上げ近き松の香
大輪の菊を育てて兄米寿
緋毛氈床几にぎあふ菊花展

宏虎
ひかり
はく子
有香

二〇二五年一〇月二十八日

相討ちの様に交差し蓮枯るる
飛行雲釣瓶落しの日を登る
正門は明治の遺構菊香る
夕日落つ海鵜の休む烏帽子岩

さつき
うつぎ
菜々
智恵子

二〇二五年一〇月二十七日

一湾の鏡風なる秋天下
パンパンにリスのほっぺは冬支度
二〇二五年一〇月二十六日

泰山
智恵子

路地裏の隅々照らす十三夜

有香

色鳥の二三汀に寛ぎぬ

智恵子

冬波の海へ展けし千枚田
団栗を供えてありし地藏かな
ボート漕ぐ湖面の夕日横切りて

智恵子
さつき
さつき

二〇二五年一〇月二十五日

ポケットの手がもてあそぶ木の実かな
秋寂ぶや前掛け古りし六地藏
阿蘇五岳見え隠れする芒原
渚辺に波音を聴く秋思かな
大鳥居凌ぐ老松色変へず
三猿のごとくに並ぶ捨案山子
投函の文懷に十三夜

ともえ
宏虎
さつき
よし女
菜々
豆狸
うつぎ

二〇二五年一〇月二十四日

緑子のあくびのうつる菊日和
噴煙をよぎる機影や秋高し
木道のつづく限りの花野かな
水車へと笈あふるる秋の水
野紺菊神なるの山の裾埋む
神苑の倒木数多身にぞしむ
石路愛でて玄関くぐる客主
沖遠く漁火せめぐ十三夜
母在さぬ里へ夜寒の駅降りる

豆狸
さつき
さつき
なつき
菜々
満天
かず
宏虎
菜々

毎日句会みのる選・二〇二五年一月二日